

「活用型学力」を育てる国語科授業・評価開発（中学校）  
—伝統的な言語文化・確かな習得学習を中心に—

教育実践研究科 教職実践専攻 教職実践基礎領域  
有田 弘樹

## 一 はじめに

### 1. 教職大学院に入学した理由

私は「子ども達に、楽しくてわかりやすい国語の授業ができるようになりたい」「子ども達の成長をあたたく支えてあげられるような教師になりたい」という思いから、学校現場ですぐに生かせるような新人教師としての「実践的な指導力」を身につけるために、愛知教育大学教職大学院に進学した。

教職大学院の二年間では、大学院における講義・演習や、小学校・中学校の学校現場（愛知県内の公立学校）で実習を行うこと等を通して、授業力の向上だけでなく、学級統率力や学校経営力等、幅広い視野で教師力の向上に努め、理論的・実践的に学び深めていくことができた。

特に、「学校サポーター」（一年半）や「教師力向上実習Ⅰ・Ⅱ」（二ヶ月）を豊橋市立青陵中学校で長期間にわたって行わせていただいたことで、教師としての実践的指導力の基礎を身につけることができたと感じている。

### 2. 題目設定の理由、本稿の目的と方法

戦後約 60 年ぶりの教育基本法・学校教育法改正を受けて、新学習指導要領が告示され（2008 年 3 月）、平成 24 年度からは中学校で完全実施される。

改正学校教育法・学習指導要領では、これまでの「生きる力」の理念はそのままに、子ども達に主体的課題解決能力を育むという観点から、義務教育の目標・学力の 3 要素（基礎的・基本的な知識・技能の習得、活用としての思考力・判断力・表現力等の育成、主体的な学習意欲の向上等）が具体的に明記された（傍線部は有田、以下同じ）（注 1）。

また「伝統と文化」の尊重を受けて、国語科では新たに〔伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項〕が新設された。小学校から中学・高校と生涯にわたって「伝統的な言語文化」に親しむ「態度」の育成が重視され、「読む、書く、伝え合う学力」育成と相互に関連させた構造的・系統的な授業・評価開発等が緊急の実践課題となっている（注 2）。

本稿では『活用型学力』を育てる国語科授業・評価開発（中学校）と題し、「生きる力」や課題解決能力につながる「活用型学力」（思考力・判断力・表現力等）の育成という新学習指導要領における重要な実践課題の観点から、「伝統的な言語文化」における国語科授業モデルについて実践的に提案す

るものである。また、本稿は修了報告書でもあるため、テーマに沿いながら「実習の中でなにを学んだのか」、「学んだことが教職に就いたときにどのような発展性をもつのか」等の、①実習における実践の報告と省察、②教職大学院での学びの成果の報告、③今後の教職生活への抱負等も述べることとする。

## 二 『学修の記録』（ポートフォリオ）の目次

教職大学院二年間の学びを『学修の記録』（ポートフォリオ）の形式でまとめた。以下、Ⅰ～Ⅷはポートフォリオの目次である（要点のみ記載）。

なお、本稿では「教師力向上実習Ⅰ」（学級経営と児童生徒理解のための実習）の必要性は十分承知しているが、授業実践（自己課題）のテーマや記録した内容、実践的な国語科授業・評価研究等の観点から、「教師力向上実習Ⅱ・Ⅲ」の報告と省察を中心に述べていくことをあらかじめお断りする。

### Ⅰ 学修の記録

- ・イメージ像（児童生徒像・教師像） ・学修の振り返り
- ・授業科目の振り返り（横断的視点から） ・チェックリスト

### Ⅱ 学校サポーター—豊橋市立青陵中学校—

- ・サポーター実習の記録

### Ⅲ 教師力向上実習Ⅰ—学級経営力と人間性育成—

- 友だちの『よさ』をみつめ、心から認め合える学級づくり
- 『話す・聞く』の基礎・基本から『豊かに』伝え深める交流・評価学習を通して—
- ・計画書 ・実習記録 ・報告書 ・資料

### Ⅳ 教師力向上実習Ⅱ—授業力向上とカリキュラム開発—

- 伝統的な言語文化における『習得・活用』の授業・評価開発
- 『平家物語』『扇の的』（光村・中二）を例に—
- ・計画書 ・実習の記録 ・報告書 ・資料

### Ⅴ 教師力向上実習Ⅲ—共同的学校経営、教師力の確認—

- 伝統的な言語文化を「楽しく」学べる国語科授業開発—『ことわざブック』をつくろう』（東京書籍・小四上）を例に—
- ・計画書 ・実習の記録 ・報告書 ・資料

### Ⅵ 特別課題実習—現代的教育課題への対応力—

- ・計画書 ・実習の記録 ・報告書 ・資料

### Ⅶ 多様なフィールド実習

- ・計画書 ・実習の記録 ・報告書 ・資料

### Ⅷ 大学院での学びの記録

- ・授業づくり ・学級経営 ・学校づくり ・その他（紀要等）

### 三 これから求められる「活用型学力」とは

#### 1. なぜ「活用型学力」の育成なのか

文部科学省による各種学力調査や世界的学力調査等から、現在の日本の子ども達は「必要な情報を見つけ出し、取り出すことは得意だが、それらの関係性を理解して解釈したり、自らの知識や経験と結び付けたりすることが苦手」であることが明らかとなった（注3）。そのため、改正学校教育法・新学習指導要領では、子ども達に主体的課題解決能力を育むための「思考力・判断力・表現力等」の、いわゆる「活用型学力」を育成することが重要な実践課題となっている。

#### 2. 「論理的な言語力」の育成を全員に

また、新学習指導要領では「活用型学力」を育むという観点から、「言語活動の充実」が教育課程全体で重視されている。例えば、国語科「言語活動例」では「説明・報告・記録・観察、発表・提案・意見・質疑、スピーチ・討議・鑑賞・批評等」のいわゆる論理的な読み取り、書き、伝え深める学力が実生活で生きる言語活動として具体的に示されている。

ここからは、国語科学習を中核にして、全教科・領域・活動や実生活に生きて働くような「論理的な言語力」（情報を主体的に判断・批評し、自分の立場・関心等から一貫した論理で「自分の考え」を発信する力）を全員に系統的に身につけさせることが、「活用型学力（思考力・判断力・表現力等）」の育成につながると読むことができる（注4）。

#### 3. 「習得・活用」の学習内容・段階の明確化

「習得・活用は整然とは分けられない」等の指摘もあるが、「習得」「活用」の学習内容・段階を明らかにすることには、大きく二つの意味が考えられる。一つは、基礎・基本（習得）から発展（探究）への指導過程における飛躍を埋められることである。二つには、「習得で身につけさせる基礎・基本の学力とは何か」「活用とは習得したことがどうなればいいのか」等の「学びの到達度」（到達目標、評価規準・基準）が、子どもにも教師にも鮮明になることである（子どもの学びの躓き・課題の診断・改善）。

「言語活動あって学習なし」（言語活動の目的化）にならないためにも、「習得（基礎・基本）」「活用（思考・判断・表現力等）」の段階で身につけさせるべき「学力（言語力）」を明確化し、系統的・段階的に指導していく必要があると考える（注5）。

なお、子ども達全員に「活用型学力」を育成する授業実践を開発するために、国語科「習得・活用型学力」の学習過程と学習モデル例（到達目標、評価規準・基準）を「表」（資料1）にまとめた。

#### 4. 楽しく必然性のある「習得学習」を

「基礎・基本の学力（習得型学力）」を全員に確かに定着させることは、公教育における「学力保証」の結果責任である。「確かな習得なくして、豊かな活用（探究）なし」と言われるように、「活用」の段階から「習得」を見直すことで、必然性ある「習得型学習」を全員に楽しく、シンプルに指導する必要がある。その際、教師は「教えるべき部分は躊躇わずに教える」ことが求められている（注4）。

資料1 国語科における「習得・活用型学力」の学習過程と学習モデル（注6）

学習段階とその位置		身につけさせる言語力、その習得から活用へ
習得型学力 ↑	<b>導入・基礎学習 【習得型学習1】</b> …全教科の基礎となる言語力を育てる学習段階	(1) 音読（内容理解の基礎）（場面・段落のまとまりごとに）、(2) 話す態度や姿勢・話型、(3) メモやノート指導、(4) 聞く態度や基礎（キーワード・具体例の数、要約・引用等）、(5) 漢字や概念・知識理解と活用の基礎（語彙力、ことわざ、故事成語等）
	<b>基本学習 【習得型学習2】</b> …国語科固有の基本となる言語力を育てる学習段階	(1) 説明文（論理的文章）の読み方・書き方の基本学習、(2) 文学的文章（民話、物語・小説、ファンタジー、詩歌、随筆等）の読み方の基本学習、(3) 「伝記（記録）」「ノンフィクション」等の読み方の基本学習、(4) 話す・聞く（伝え合い）の基本学習
活用型学力 ↓	<b>発展的学習 【活用型学習1】</b> …「自分の考え」を論理的にまとめるための言語力を育てる学習段階	(1) 「自分の考え」を持つ学習…教材理解（受信）から、説明力（発信）レベルの指導 (2) 自分の立場・関心、問題意識等から「習得」の再構成の学習…「自分の考え」を論理的にまとめることの指導（一貫した主張・構成の型の理解、キーワード、題名のつけ方等）
	<b>交流・発信学習 【活用型学習2】</b> …論理的に伝え深め合うための言語力を育てる学習段階	(1) 「発信」技術の基本モデル学習…論理的な構成、要約・引用、資料等の意図・効果等 (2) 「交流・学び深め合う」技術の基本モデル学習から活用へ…正確に豊かに読み解く（聞く）、要約・引用、メモ、質疑応答・改善意見が言える、新たな課題発見等
評価・一般化	<b>評価・一般化学習</b> …自己（相互）評価、他教科や生活に生かす「学びの一般化」を得るための学習段階	(1) 単元全体における「学びの到達度」の理解…自己評価能力を育てる (2) 新たな課題発見・疑問が持てる…習得・活用型学習から探究型学習へ (3) 学習の「メタ認知能力」を育てる…学びの一般化への活用、自己との対話等
探究型学力	<b>探究型学習</b> …「異質な集団・組織」の中で「自分の考え」を生かし互いに学び深め合う学力を育てる段階	(1) 国語科における総合発展学習 (2) 各教科・活動・体験・読書力等を生かした発展学習 (3) 学習者の関心・意欲、問題意識を生かした課題解決学習、総合的な学習の時間

#### 四 「伝統的な言語文化」国語科授業開発への視点

##### 1. 「伝統的な言語文化」の新設

教育基本法・学校教育法改正により、各教科等における「言語活動の充実」とともに「伝統や文化に関する教育の充実」が示された。これに伴い、新学習指導要領（国語科）では、「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」が新設され、小学校低学年から伝統的な言語文化に「親しむ」態度の育成が目指されている。

##### 2. 国語科授業開発への視点

言語文化とは「我が国の歴史の中で創造され、継承されてきた文化的に高い価値を持つもの」「古代から現代までの各時代にわたって、表現し、受容されてきた多様な言語芸術や芸能」伝統や文化についての深い理解は「他者や社会との関係だけではなく、自己との対話をしながら自分を深めていく上でも極めて重要」とされている（注7）。

言語はコミュニケーションの方法や思考・発想等の形式（型）であるとともに、「アイデンティティ」そのものであり、それぞれの国や民族固有の伝統や文化・歴史という厚みを持っている。そのため、小学校から「伝統的な言語文化」を学ぶことは、日本文化・日本人の精神（ものの感じ方）や思考・発想形式（型）、日本人特有の情緒や美意識・価値観、日本語の構造と歴史・位置等を理解することにつながる。現代は国際化・グローバル化が進む複雑な情報社会であるからこそ、子どもたちが日本文化・日本人の精神や規範意識、倫理的な感覚、価値観等を学び、自分の生き方等（アイデンティティの在り方）を考え深めるという視点はますます重要である。

そのため、小学校から中学校・高校と生涯にわたって「伝統的な言語文化」に「親しむ」態度の育成とともに、「読む・書く・話す聞く」学力の育成とも相互に関連させた、構造的・系統的な国語科授業・評価開発が必要である（注8）。

##### 3. 「伝統的な言語文化」授業化のポイント

「伝統的な言語文化」を授業化するにあたっては、以下のようなポイントが必要であると考えられる。

- (1) 「到達目標」（身につけさせる言語力）の明確化  
— 「習得」から「活用」への段階的な学習過程を—
- (2) 「音読・暗唱」の重視（範読・斉読・指名読み等）  
— 音声・リズムによる思考・発想の型の学習に—
- (3) 「現代語訳」の積極的な紹介と活用  
— 古典の魅力や楽しさ、おもしろさの発見に—
- (4) 省略されている「背景・価値観等」の選択と指導  
— 日本人・日本文化の理解から自らの生きる課題へ—
- (5) 文学的・論理的文章を読む「言語技術」の応用  
— 正確な内容理解から「自分の考え・解釈」を持つ—

#### 五 授業づくり実践（1）—教師力向上実習Ⅱから—

##### 実践テーマ

伝統的な言語文化における「習得・活用」の授業・評価開発  
— 『平家物語』『扇の的』（光村・中二）を例に—

##### 1. 子どもの実態と実践のポイント

###### (1) 子どもの実態

対象は豊橋市立青陵中学校2年（11月）の生徒。学校全体で朝読書を取り入れていること等から、子ども達は本を読むことが好きである。給食や放課等でも、自分で選んだ好きな本（有名人が書いたノンフィクションや推理小説、現代小説等）を読む姿をよく見かける。その一方で、図書館にある古典作品を進んで読む子は少ない。本実践を通して、子ども達に「古典」を読むことへの魅力や楽しさに気づかせ、読書活動の幅を広げさせたいと考えた。

###### (2) 実践のポイント

『平家物語』は、貴族から武士の時代へと移る転換点を、史実と虚構を織り交ぜ描かれている。新しい価値観に翻弄されながら死に向き合わざるを得ない平家と、厳しく追い詰める新興勢力としての源氏が、極限状態の中で人間らしい姿を発揮するところにこの作品の魅力やドラマがある。

実践にあたっては、「滅びゆくもののおもしろさ」の発見を、死と向き合う『平家物語』群像の描写から、「時代の価値観や流れに翻弄されながら生きていく人間の運命」や「時代を超えてある日本人の感性や情緒（親子の情愛・主従関係の絆等）」等の観点として生かすことが重要である。これらは、欧米型の価値観（「勝者になること」の重視等）には見出しがたい日本人の豊かな思想・美意識の一つである。

『平家物語』（記録、小説）の読み方を楽しく教えることで、読書や生活場面等に生かせる「言語力」を育てるとともに、日本人としての自分の「生き方」等も考え深めさせることができると考える。

##### 2. 学習計画—身につけさせる「言語力」の明確化—

本実践では、「習得」から「活用」（「探究」）までの段階的・系統的な学習過程と、それぞれの学習段階で身につけるさせる言語力（到達目標）を、次の表（資料2）のように設定して単元を構想した。

「習得」の学習段階では、『平家物語』（記録、小説）の読み方といった国語科固有の「言語力」を身につけさせる。また「活用」の学習段階では、「読書レポート」を論理的にまとめることやそれらを伝え深めることを通して、「自分の考え・解釈」を発信・交流・評価する「言語力」を身につけさせる。

##### 3. 指導の実際—古文の「習得」から「活用」へ—

「習得型学習2」（基本学習）では、以下七つのポイントを踏まえて行った。これらのポイントは、『平家物語』（古文教材）だけでなく、他の記録、

小説教材にも応用可能な観点であると考えている（「記録、小説」における言語技術）。

- (1) 省略された「当時の常識・時代背景等」を理解する。
- (2) 「状況設定」（登場人物・時代・舞台等）を確かめる。
- (3) 「場面構成」（物語・小説の「型」）を理解する。
- (4) 「中心人物」の変化・解釈を理解する。
- (5) 「対比的人物」の役割・効果を理解する。
- (6) 「個性的な表現・イメージ」の読み方を理解する。
- (7) 「自分の考え・解釈」を持つ。

**(1) 導入・基礎学習【習得型学習1】（1時間）**  
**－古文の魅力や楽しさ、学び方を学ぶ－**

「古文はむずかしい」「わかりにくい」と考える子ども達に学習意欲を持たせるため、古典語が持つ独特の意味や当時の常識的価値観等を「クイズ形式」で楽しく理解させた。その後、古典学習のポイント（学ぶ意味・方法）を簡単に示した。

次に、教師が「扇の的」を範読して聞かせた後、子ども達に初発の感想を書かせた。子ども達からは「与一にはどんな意味があるのか」「平家が踊り出したのはなぜか」等、物語・小説を読むための基本的な観点に沿った鋭い疑問・意見が多く出された。

**(2) 基本学習【習得型学習2】（3時間）**  
**－観点を持って「物語・小説」を読む学習－**

基本学習では、古典（古文）も現代文の「読み方」を応用することができるという観点から、「学習シート」（紙面の関係で省略した）を開発・活用し、五つの観点を持って読み取らせた。

**①時代背景と日本人の精神・価値観の理解**

作品の時代背景や当時の常識的価値観を理解させることは、現代を生きる日本人の豊かな思想・美意識の原点等を理解させるためにも必要な知識である（古典学習の重要な観点）。そのため、作品が描かれた「時代背景」や作品全体を貫く「テーマ」と「あらすじ」、「時代の常識的価値観」等を理解させた。

**②場面構成（あらすじ）とキーワードの理解**

「扇の的」のおおまかな内容（あらすじ）と作品の文章構成を理解させた。学習シートに取り組む中で、本文中のキーワードを見つけ出し、小説（・物語）の基本的な構成である「状況設定・出来事の発端・展開・発展・結末」を理解できるよう作成した。

**③状況設定の理解**

「状況設定」を正確に理解することは、記録や小説を「情報」として読むための基本的な観点である。日時、季節、舞台、登場人物、陣の位置関係、海の状態、扇までの距離等を「クイズ形式」や「キーワード化」したりして楽しく理解させた。

**④人物像の設定と役割・効果の理解**

人物像が「はじめ」と「おわり」でどのように変化するかを読み解くことも、記録や小説の基本的な読み方の一つである。会話と行動描写等から、「中心人物」（与一）と「対比的人物」（年五十ばかりなる男、源義経、武将達）の設定と変化（行動の意味・立場等）を理解させた。

**⑤個性的な表現（描写）の方法と効果の理解**

タイトルにもある「扇」に込められた象徴的なイメージを読み取らせた。交流の中で、子ども達から

資料2 『平家物語』における「習得・活用」の学習過程（学習モデル）と身につけさせる言語力（6時間完了）

学習過程・段階	時	主な学習内容（活動）	身につけさせる言語力（到達目標）
①習得1 （導入・基礎学習）	1	1 古文クイズをする。 2 古文の学び方（読み方）を理解する。 3 「自分の考え・解釈」を持つための基礎的な観点に沿って「扇の的」を読む。	1 古文への興味・関心を高める。 2 古文を学ぶ意義、「読み方」がわかる。 3 おもしろい場面や疑問に思った場面等、「自分の考え・解釈」が持てる。
②習得2 （基本学習）	2 3 4	4 省略された「常識・時代背景」を理解する。 5 「場面構成（あらすじ）」とキーワードを理解する。 6 「状況設定」を理解する。 7 「中心人物」の設定と変化を理解する。 8 「対比的人物」の設定と役割・効果を理解する。 9 「優れた表現・象徴的イメージ」を読み取る。	4 古文特有の知識（2～3つ）を理解する。 5 「場面構成」がわかり、「あらすじ」が書ける。 6 日時、季節、陣の位置関係、海の状態、扇までの距離等が正確に読める。 7 「与一」の出自や年齢・身分・立場等わかる。 8 「義経」「年五十ばかりなる男」「武将達」の役割・効果がわかる。 9 「扇」に込められた象徴的イメージが読み取れる。
③活用1 （発展的学習）	5 6	10 論理的な「読書レポート」の書き方を理解する。 11 「扇の的」についての「読書レポート」（論理的な読書意見文）をまとめる。	10 「はじめ・なか・まとめ・むすび」の構成で書ける。 11 自分の好きな（印象的な）「場面・人物・表現等」の中から観点を決めて、「自分の考え・解釈」を書く。
④活用2 （発信・交流学習）		12 読書レポートをもとにして、発表会をする。 13 友だちの発表に対して意見を持ち、互いの意見を交流する。	12 観点別にグループで交流し、質疑応答ができる。 13 学級全体で交流し、質疑応答ができる。（友だちのよさや新たな自己課題の発見へ）
⑤評価・一般化	6	14 学習全体を振り返る。 15 振り返りを交流し、今後の読書や生活場面に生かす視点を獲得する。	14 観点別に自己評価し、学習したことを一般化できる。 15 学習の振り返りから、今後の読書・生活場面への発展（課題やこだわり等）を意識できる。

※豊橋市立青陵中学校では、学校の諸事情等により6時間完了で実践させていただいた（「活用2」は省略）。



示した) 学習シートの開発・活用により、文章を読み解くことや「自分の考え」をまとめることに苦手意識を持つ子ども達にも、意欲的に学習に取り組ませることができた。

**③日本人の思考・発想の「型」を楽しく**  
 ー国語科学習から日本文化・日本人の精神等を学ぶー

「習得型学習1」(導入・基礎学習)では、古典語の特色や時代の常識的価値観等を「クイズ形式」で楽しく学んだり、「習得型学習2」(基本学習)で、『平家物語』による「無常観」の定着や、人物像や描写の読み取りから「極限状態で発揮される『生の輝き・人間性』」等を学んだりすることができた。

子ども達からは「昔の日本人の価値観を知ること、より世界を広げて周りを見られるようになりました」等の意見が出された。『平家物語』の学習を通して、子ども達に日本人の思考・発想の形式(型)、現代にも生きる日本人特有の美意識・情緒、価値観等を学ばせることができた。

**(2) 今後の課題**

**①子どもの実態に合わせた授業づくり**  
 ー子どもを生かすための指導技術の向上ー

授業実践をさせていただく中で、様々な課題を感じたが、大きく二つのことを意識するようになった。一つは、子ども達に伝わる言葉を使った明確な「発問・指示」である。もう一つは、子ども達が知的で楽しく学び深めることのできるような「言語活動」の位置づけ等である。中学校の授業では、教師主導の「説明型授業」になりがちのため、一時間の指導内容と言語活動(習得と活用の関係性)を明確にした「知的で楽しい授業づくり」の必要性を感じた。

**②子どもの課題意識を生かした授業づくり**  
 ー「学習シート」の開発・活用における課題ー

本実践は『平家物語』(古文)における授業モデル開発を行ったため、限られた授業時数(6時間)では「量的・質的」にも厳しいものとなった。そのため、学習シートの指導内容も多くなり、扱いづらい面も課題として明らかになった。また、子ども達の課題意識(子どもの願い)を重視した単元(・授業)構想をするという点においては、「習得型学習1」(導入・基礎学習)で「学習の見通し」を示さなかつたため、「必要性・追究性・創造性」等を子ども達に十分持たせることができなかった。

「習得」から「活用」「探究」までの学習過程(関係性)を明らかにすることは、「到達目標」(教師の願い)を明確にし、子どもの「課題意識」(子どもの願い)を生かした授業づくりにもつなげることができると考える。子ども達に「課題意識」を持たせ(探究)、学び方の基礎・基本(習得から活用へ)が目に見えるような「学習シート」を開発・活用できるだけの力量の必要性を感じた。

**六 授業づくり実践(2)ー教師力向上実習Ⅲからー**

**実践テーマ**  
 伝統的な言語文化を「楽しく」学べる国語科授業の開発  
 ー「ことわざブックを作ろう」(東京書籍・小四上)を例にー

**1. 子どもの実態と実践のポイント**

**(1) 子どもの実態**

対象は西尾市立白浜小学校4年(12月)の児童。子ども達は毎日「生活日記」をまとめたり、休日にあった出来事をスピーチしたりして、自分の生活経験を語る事ができる。また、空き時間には図書館や学級文庫の本を楽しそうに読む姿も見かけられる。一方で、本から読み取った内容と自分の生活経験を結び付けて感想を語れる子どもは少ない。本実践を通して、子どもたちに「言語文化」に親しみを持たせ、普段の生活の中にも生かせる視点を獲得させたいと考えた。

**(2) 実践のポイント**

「ことわざ・慣用句・故事成語等」は、日本人における精神の骨格であり、思考・発想の形式(型)を形成した「漢文脈の伝統」である。そのため、ことわざ・慣用句・故事成語等を学ぶことは、先人達が創造し継承してきた「生きる知恵」(言語文化と思考方式等)を理解するとともに、これからの日本人としての自分の「生き方」や「考え方」等に生かしていくためにも重要であると考えた。

実践にあたっては、「ことわざ・慣用句・故事成語」の意味と使い方等を理解させるとともに、自分の「生活経験」を語る報告・解釈等を通して、実感を伴った楽しい学習にすることができると考える。

**2. 学習計画ー身につけさせる「言語力」の明確化ー**

本実践では、「習得」から「活用」(・「探究」)までの段階的・系統的な学習過程と、それぞれの学習段階で身につけさせる言語力(到達目標)を、次の表(資料4)のように設定して単元を構想した。

資料4 「習得・活用」の学習段階と身につけさせる言語力

学習過程	時	主な学習内容	身につけさせる言語力
習得1・2 (基礎・基本)	1	1 「ことわざ等」の意味やその使い方を理解する。	1 クイズやマンガ等の活用で、意味や使い方がわかる。
活用1 (発展的)	2	2 自分の好きな「ことわざ等」の調べ学習をする。	2 言葉の意味と、エピソードを書くことができる。
	3	3 自分の好きな「ことわざ」等の「紹介文」を書く。	3 「はじめ・なか・まとめ・むすび」で書くことができる。
活用2 (発信・交流)	4	4 書いた原稿をもとに、「発表会」をする。 5 相互に意見の交流をする。	4・5 発表者に対して、意見や質問を持ち、相手に伝えることができる。
評価・一般化	4	6 学習を振り返り、学びの一般化をする。	6 学んだことを自己評価し、今後を生かす視点を獲得。

### 3. 指導の実際—習得から活用への段階的な学習指導—

#### (1) 導入・基礎、基本学習【習得型学習】(1時間)

##### —クイズ・マンガを活用して楽しい学習に—

「習得型学習」では、「ことわざ・慣用句・故事成語」の意味と使い方を、クイズやエピソードにすることで楽しく考えながら学ぶことができた。また『ドラえもん』や『ちびまる子ちゃん』の「ことわざ事典」(マンガ)を活用することで、考えることが苦手な子どもも集中して取り組むことができた。

#### (2) 発展的学習【活用型学習1】(2時間)

##### —ことわざの「紹介文」を論理的に書く学習—

「活用型学習1」では、「とっておきのことわざを紹介しよう」という言語活動を設定した。子ども達には、自分の好きなことわざ・慣用句・故事成語を1つ選ばせ、それにまつわる「エピソード」を振り返らせた。紹介文は論理的な文章構成(はじめ・なか・まとめ・むすび)でまとめさせた(資料5)。

#### (3) 発信・交流学习【活用型学習2】(1時間)

##### —「紹介文」をもとに互いの考えを学び合う—

「活用型学習2」では、4人の子ども達を指名し、まとめた紹介文を発表・交流させた。話し方・聞き方の観点を示すことで、話し手にも聞き手にも評価観がわかるようにした。交流はエピソードの内容や伝えたいこと、意見・質問等を簡単にメモさせて、「自分の考え」を持ちながら聞くことを意識させた。

#### (4) 評価・一般化学習(紙面の関係で省略)

### 4. 実践の成果と今後の課題

#### (1) 実践の成果

##### ①「伝統的な言語文化」に親しむことができた。

単元全体の振り返りでは、「すごく楽しかった」「昔の人は短い言葉で生活に役立つ言葉を作っているすごい」等、日本人のものの感じ方・考え方等を学ぶことの楽しさに気づけた感想や、「ことわざは昔の人の“ちえ”が集まっているから、生活のいろんな面で役立っていききたい」等、今後の生活に生かせることに気づけた感想等を見ることができた。

「伝統的な言語文化」の習得から活用までの段階

的な学習過程と、子どもの生活経験を生かした言語活動を設定することで、「読む、書く、伝え合う」学力を育てるとともに、日本人の精神・思考等も楽しく親しませることができたと考えられる。

##### ②全員の児童が「紹介文」を論理的にまとめられた。

子どもたちに「活用型学力」を育てるという観点から、「とっておきのことわざ紹介」を言語活動として設定した。論理的な文章構成の「型」(はじめ・なか・まとめ・むすび)や教師のモデル原稿を示したこと等により、子どもたち全員が選んだことわざ等と自分の生活経験(エピソード)とを結びつけた、個性的で豊かな原稿をまとめることができた。

#### (2) 今後の課題

##### ①子どもの実態に合わせた「発問・指示・説明」を

「説明が長すぎる」「どうしたらよいかがよくわからない」等のご指導をいただいた。長く説明することは、子どもの学習意欲を低下させ、学ぶことを曖昧にさせてしまう。また、「発問・指示」は「何を・どうしたらいいか」を示すことでもある。あらかじめポイントをしぼることや、子どもの実態に応じて適切な言葉遣いをする必要がある。自分自身の「言語力」を向上させ、リズムとテンポがある、知的で楽しい授業ができるようになりたい。

##### ②子どもの考えを広げ深められるような交流学习に

「自分の考え」をわかりやすく説得力をもたせて話したり、「自分の考え」をもちながら聞いたりすることは、「活用型学力」育成につながると考える。

子ども達全員が「学び合う」ためには、伝え合いの「習得型学力」(キーワードのメモ、主張のキーセンテンス化、交流の観点等)が全員に自覚できている必要があり、「だれの・どの意見を広げ深めるのか」等の教師の高い授業力も求められると考える。

本実践では、「伝え合いのモデル学習」(活用型学習2)を行ったことで、活発に交流することはできた。ただ、深まりの少ない形式的な交流となってしまったため、今後は子どもの個性や工夫等を広げ深められるような指導技術を身につけていきたい。

むすび	まとめ	なか	はじめ	導入
このからしは...	心に残っているエピソード(思い出・出来事)	ことわざの意味	しょうがい	
	エピソード	エピソード		

資料5 「ことわざの紹介文」のシート  
— ことわざのおもしろさを論理的に書き、「自分の考え・解釈」をわかりやすく伝える技術を学ぶシートである。

「はじめ・なか・まとめ・むすび」の論理的な文章構成(4段階構成)で書かせた。それぞれの項目で「①何を書くのか、②どのように書くのか(文例)」を明確に示すことで、全員の子ども達を書くことができた。

## 七 二つの実践を通して学んだこと

### —「活用型学力」を育てる国語科授業とは—

#### 1. 「習得」から「活用」までのステップを

##### —「到達目標」を明確にした段階的な学習過程—

子ども達に「活用型学力」を育てるという観点から、「伝統的な言語文化」を中心とした二つの実践を行った。そこでは、「習得」から「活用」までの学習内容を段階的に行ったことで、子どもにも教師にも「何が、どの段階で、どうなればいいのか」という「評価観」（到達目標、評価規準・基準）を明確にすることができた。その結果、中学校では約9割、小学校では全員の子ども達が「習得」したことを「活用」して「自分の考え・解釈」を論理的にまとめることができた。

「習得」から「活用」までの到達目標から学習過程を段階的に構成することで、子ども達全員に他教科や読書、生活場面等にも生きる「活用型学力」を育てることができると考える。

#### 2. 「伝統的な言語文化」に親しむ授業づくり

##### —「言語力」育成と「アイデンティティ」形成—

「伝統的な言語文化」（古文、ことわざ・故事成語等）の授業実践を通して、子ども達からは「昔の日本人の価値観を知ること、より世界を広げて周りを見られるようになった」、「ことわざは昔の人の“知恵”が集まっているから、生活のいろんな面で役立てていきたい」等の感想が出された。

「伝統的な言語文化」を授業化するにあたっては、子ども達に「言語力」（読む、書く、話す聞く学力）を育成するとともに、日本文化・日本人の精神や思考、価値観等に気づかせ、今後の自分の「生き方」を考えさせる（「アイデンティティ」の形成）という視点がますます重要であると感じられた。

#### 3. 年間を見通して、系統的に「学力」を育てる

##### —「教科カリキュラム」の開発と評価の必要性—

論理的な文章構成を用いた「報告文（レポート）」等を書くことや、「自分の考え・解釈」を相手に効果的に伝え深め合う「発信・交流・評価」の方法等、一つの単元だけですべてを指導し、全員の子ども達に「学力（言語力）」を定着させることは難しい。

そのため、学校・教師等によって、「教科カリキュラム」を作成していく必要があると考える。義務教育修了（中学3年）までに「何が、どうなればいいのか」等の評価観から、各学年（年間・学期）の学習内容と評価等を系統的・段階的に整理することが重要である。その際、各教科等における「習得」から「活用」までの学習過程と到達目標を明確にすること（各教科等の学習モデル開発）は、子ども達の実態に応じた指導事項の重点化（子どもの躓きや課題の正確な診断、教師の指導事項の改善）等につながるのではないかと考えられる。

## 八 教職大学院（二年間）で学んだこと—七項目—

### 1. 学級経営の観点から

#### （1）学級を統率するのは「教師」である

##### —よい学級のイメージを持ち、「荒れ」を最小限に—

実習を通して、「どれほど力のある教師の学級でも荒れる可能性があるという概念をもつことが必要」ということを教えていただいた。

学級の荒れを最小限に抑えるためには、まずは教師自身が「よい学級のイメージ」（①ルールやシステムが機能している、②公平である、③自由さがある等）を持つ必要がある。また、中学生の子ども達には「教師の価値観」をあまり強要せず、判断は「子どもに任せる」（教えて考えさせる）という姿勢で「思いやりのあるやさしい言葉」をかけてあげることが大切であると感じた。

学級を統率するのは「教師」であり、学級経営の基本は、日常のどんな些細な出来事に対しても見逃さず、柔軟に適切に対応できることであると学んだ。

#### （2）子ども達の「問題行動」への対応

##### —共感的な理解と教職員・保護者との連携の必要性—

小学校高学年あたりから中学校ぐらいになると、人間関係上のトラブルや、いじめ、不登校、授業エスケープや触法行為まで、問題行動を起こす子どもが増えてくる。こうした行動を起こす「背景」には、自己肯定感の欠如や愛情不足、コミュニケーション能力の低下等、心の悩みや不安、葛藤等から引き起こされるものが多いように感じられた。

こうした行動に対しては、一方的な押さえ込みや価値観の押しつけ等を行うのではなく、まずは子どもへの「共感的な理解」（思いを受け止め）を行うことが大切である。「その子の人間性を叱るのではなく、行動を叱る」ことを念頭においた指導の必要性を学ぶことができた。また、担任一人で思い悩み抱え込むのではなく、学校や学年の先生方と連携して対応していくこと。さらには、学校内外の情報等を保護者に正確に伝え、「家庭」とも連携して子ども達を育てていくことの大切さも学んだ。

### 2. 授業づくりの観点から

#### （3）子ども達に学びの楽しさと必然性を

##### —「到達目標」（評価基準）を明確にした授業づくり—

子ども達に「学力保証」することは、学校や教師の公的な結果責任の一つである。「到達目標」（評価規準・基準）を明確にした授業（・単元）を構成することにより、子ども達にとっては「この授業で何が、どうなればいいのか」が明確となり、学習意欲も高まると考えられる。一方で、教師にとっては、子どもの学びを正確に読み取り、その子らしい発見や躓き・課題等を判断し、その後の改善に生かしていくことができると考えられる。

子ども達に学びの「楽しさ」と「必然性」を実感



させるためにも、「到達目標」(評価基準)を明確にした授業づくりの大切さを学ぶことができた。

**(4) 「習得」から「活用」への学習過程の開発**  
—国語科での学びから他教科・生活場面での活用へ—

新学習指導要領では、国語科は全教科・領域・活動における「言語力」育成のための中核的役割があると位置づけられている。そのため、国語科での学び(「論理的な言語力」の育成、言語技術等)が他教科や領域・活動、読書や生活場面等に生きて働くような(基礎・基本学力の「習得」から、思考力・判断力・表現力等の「活用」への)国語科授業・評価システムの開発が求められているといえる。

本稿で実践的に提案してきたように、ゴールとしての「評価観」(到達目標、評価規準・基準、言語技術等)を明確にすることにより、「習得」から「活用」(・「探究」)への段階的な学習過程(国語科学習モデル)を具体的に示すことができた。

**(5) 授業づくりと学級経営の相互関連性**  
—人間関係・コミュニケーションの土台は「言語力」—

これまでの三つの実習を通して、授業づくりと学級経営は相互に関連し合っていることを、強く実感させられた。それは、子ども達が国語科授業において「論理的な言語力」を学んでいくとともに、日常生活(学級経営)の中で好ましい人間関係やコミュニケーション等の「言語力」(挨拶や言葉遣い、報告文や記録文の作成、スピーチや討論等)を学んでいるからである。授業づくりと学級経営は単独で切り離されるものではなく、両者を相互に関連させながら実践していくことが必要であることを学んだ。

**3. 組織的・共同的な学校運営の観点から**

**(6) 学校の実情に柔軟に対応できる力を**  
—学校、児童生徒への「実態把握力」の必要性—

それぞれの学校には、それぞれの学校が築き上げてきた歴史・文化・伝統や特色、地域とのつながり、児童生徒の実態や課題等が異なっている。新任教員として学校に勤務する際には、その学校の特色や児童生徒の実態、地域・保護者の実情等をできるだけ早く把握し、柔軟に対応していけることが、子ども達の成長を支えることにつながると学んだ。

**(7) 教員間で円滑に「連携」していくために**  
—教職員全員が「協力」して一人の子どもを育てる—

学校は果たすべき「公的な結果責任」(学力保証や人間性・社会性の育成等)を果たすため、「学校目標」を設定していた。この目標を達成するために、学校長をはじめとした教職員全員が「連携」をはかり、組織的・計画的に職務に取り組んでいた

子ども達の「よりよい成長を支えていく」ためにも、学校組織の一員として「何を、どのように動いていけばいいのか」を絶えず考えながら職務を果たしていけるようにしたい。

**九 おわりに—これからの教師生活に向けて—**

来年度からは、愛知県内の公立中学校(尾張・愛日地区)で国語科教師として勤務させていただくことになっている。教職大学院で学んだことを、これからの教師生活にどのように継続・発展させていくのかについて、以下3項目述べていくこととする。

**1, 今、改めて目指すべき「教師像」**  
—子どもに「学びの楽しさ」を実感させられる教師に—

「教師力向上実習Ⅲ」最終日に、子ども達が書いた文集をもらった。そこには、「私は有田先生の授業がとても楽しくわかりやすかったので大好きでした」「ぼくは国語はあまり好きではなかったけど、有田先生のおかげで国語が少し好きになりました」等、子ども達からの温かく思いの込められたメッセージがたくさん記されていた。来年度以降、たくさん子ども達と出会い、いろいろなドラマがあると思う。どんなことがあっても、子ども達に「学びの楽しさ」を実感させられるような教師になれるよう、不断の努力と研究を継続していきたい。

**2, 伝記・ノンフィクションの授業がしたい**  
—「事実の記録」から自分の「生き方」を考えさせる—

新学習指導要領(国語科)では、小学校高学年で「伝記を読み生き方を考える」項目が明記された。しかし、「伝記・ノンフィクション教材」は文学とも説明文のどちらかに分類することは難しく、研究的・実践的にも扱われることがあまり多くはなかったようである。そこで、「伝記・ノンフィクション」の特質や構造等について勉強していくことを通して、伝記・ノンフィクションから歴史に関わる人間の生き方やすばらしさ、成長等を読み取り、子ども達それぞれに自分の「生き方」を考えさせられるような授業をしていきたい。

**3, 子ども達の「成長」を心から喜べる教師に**  
—「魂の叫び」をあたたく受け止めていきたい—

一年半の学校サポーター実習を通して、現代の中学生達は、人間関係や家族関係、勉強や部活、なかには自分の「生き方」等について、様々な不安や悩み、葛藤等を抱えながら毎日の生活を送っていることに驚かされてきた。そこには、複雑な家庭環境や友人関係、忙しい日々の生活等にストレスを感じている子ども達の姿があった。

しかし、こうした思いを抱えた子ども達の「心」を支えてあげられる(「魂の叫び」を受け止めてあげられる)のは、心の底から信頼できる両親であり、友人であり、「教師」であることに気づかされた。

これから教員生活を送っていくにあたり、どんなに辛く苦しいことがあっても、「子どもから何度裏切られても、自分は決して裏切らない教師」に、子ども達のほんの少しの「成長」でも心の底から喜べるような教師であり続けていきたい。

## 【注 記】

- 注1 『学校教育法』第30条第2項(2007年6月一部改正)
- 注2 『小学校・中学校学習指導要領』(文部科学省2008年8月), 「幼稚園・小学校・中学校・高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について(答申)」(同2008年1月)
- 注3 「言語活動の充実に関する指導事例集【小学校版】」(同2010年12月)
- 注4 佐藤洋一「学校全体で取り組む『言語活動の充実』, 何が実践課題か?—新課程実施に向けた『言語力』育成・授業開発, カリキュラム開発と重点化—」『平成22年度愛知県三河教育研究会・事例集』(三河教育研究会調査委員会2011年3月)
- 注5 佐藤洋一「二つの『活用型』学力のステップを」『教育科学国語教育臨時増刊』(明治図書2009年2月)
- 注6 佐藤洋一氏が提案する「『論理的思考力・判断力・表現力を鍛える』指導過程モデル」をもとに有田が再構成した。
- 注7 『小学校・中学校学習指導要領解説 国語編』(文部科学省2008年8月)
- 注8 佐藤洋一「戦後教育の時代は終わった—伝統的な言語文化重視—」『現代教育科学』(明治図書2011年11月)、同『伝統的な言語文化』のテキスト形式を生かす『教育科学国語教育』(同2012年1月)
- 注9 左近妙子「『論理的に書く力』のステップ学習で『表現力』を伸ばす」『教育科学国語教育』(明治図書2010年12月)

## 【主な参考文献】(注記は除く)

### 1. 新学習指導要領関係

- (1) 『小学校・中学校学習指導要領解説 総則編』(文部科学省2008年8月)
- (2) 『平成19年度文部科学白書』(同2008年4月), 中央教育審議会答申「児童生徒の学習評価の在り方について(報告)」(同・2010年3月)等。

### 2. 国語科授業づくりに関わる文献

- (1) ドミニク・S・ライチェン編著『キー・コンピテンシー国際標準の学力を目指して』(明石書店2006年5月)
- (2) 佐藤洋一編著『国語科「習得・活用型学力」の開発と授業モデル1~4』(明治図書2011年10月)
- (3) 同・石田浩一「情報の論理的な『習得』から『活用(構成・発信・交流)』への授業システム」(『愛知教育大学研究報告(教育科学編)第59輯』2010年3月), 同・岡田智「小説における『習得・活用』の国語科授業・評価開発」(『愛知教育大学教育実践総合センター紀要第13号』2010年2月)等。
- (4) 有田弘樹「これからの新入教員に求められる『実践的な指導力』—『論理的な言語力』を育む国語科授業・評価の開発—」(平成23年度日本教育大学協会研究集会・発表紀要2011年10月)
- (5) 小森茂『なぜ「言語活動の充実」なのか』(明治図書2011年4月), 大熊徹編著『小学校国語科「活用型学習」の授業モデル』(同2009年8月), 同編著『中学校国語科「活用型学習」の授業モデル』(同2009年8月)等。

### 3. 「伝統と文化」に関わる文献

- (1) 菱村幸彦『戦後教育はなぜ紛糾したのか』(教育開発研究所2010年), 藤原正彦『日本人の誇り』(文春新書2011年)等。

- (2) 佐藤洋一・有田弘樹「伝統文化(古典)における『習得・活用』の授業開発—『竹取物語』のテキスト形式をめぐって—」(『愛知教育大学研究報告(教育科学編)第61輯』2012年3月)
- (3) 蔭山江梨子「日本文化・思考の型を楽しく—『平家物語』「扇の的」を例に—」『教育科学国語教育』(明治図書2011年2月) 同「中学・高校における古典指導の開発」『同臨時増刊』(同2009年5月), 左近妙子「古典で身につけさせたい国語学力」『同』(同) 同『伝統的な言語文化』の学習過程で身に付ける言語力を明確に」日本言語技術教育学会編『『伝統的な言語文化』を深める言語技術』『言語技術教育19』(同2012年)等。
- (4) 日本言語技術教育学会編『『伝統的な言語文化』を活かす言語技術』『言語技術教育18』(同2009年2月), 同編「新教材・伝統的な言語文化をどう授業化するか」『言語技術教育21』(同2012年2月), 市毛勝雄編『『伝統的な言語文化』を教える1~3』(同2009年8月), 大森修『楽しい伝統的な言語文化の授業づくり(1~6年)』(同2009年9月), 花田修一監修・編著『ことわざ・故事成語・慣用句を中心とした学習指導事例集』(同2011年11月), 田中洋一編著『国語力を高める言語活動の新展開〔伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項〕編』(東洋館出版2009年5月)等。

### 4. 国語科教材開発に関わる文献

- (1) 角川書店編『ビギナーズ・クラシックス 平家物語』(角川文庫2001年), 梶原正昭「平家物語」『新日本古典文学大系』(岩波書店1991年), 市古貞次「平家物語」『新編日本古典文学全集』(小学館1994年), 上横手雅敏『平家物語の虚構と真実(上下)』(はなわ書店1985年), 高橋昌明『平家の群像—物語から史実へ—』(岩波新書2009年)等。
- (2) 栗谷英雄『ドラえもんのことわざ辞典』(小学館1991年), 五味太郎『ことわざ絵本』(岩崎書店1986年), 川島優『小学生のためのことわざをおぼえる辞典』(旺文社2011年) 同『ちびまる子ちゃんのことわざ教室』(集英社2002年)等。

## 【付 記】

教職大学院2年間の実習は, 以下の学校で行わせていただいた。

「**学校サポーター**」「**教師力向上実習Ⅰ・Ⅱ**」 豊橋市立青陵中学校  
(中島健治校長, 指導教官 岡崎正彦・浦野有輔・森下真衣先生)

「**教師力向上実習Ⅲ**」 西尾市立白浜小学校  
(加藤幹根校長, 指導教官 池田義和先生)

「**特別課題実習**」 豊田市立東保見小学校  
(新美隆一校長, 指導教官 清家千恵子・風間彩香先生)

なお, 実習中は校務御多忙の中, 多くの諸先生方に励ましのお言葉とご指導・ご助言をいただきました。本来ならばお一人ずつお名前をあげるべきなのですが, 紙面の制約上省かせていただきました。ここでお世話になった全ての諸先生方に, 心から感謝申し上げます。

最後になりましたが, 「学校サポーター」で継続的にご指導して下さった蜂須賀渉(現豊田市立若園小学校教頭)・白井正康先生, 「実習Ⅰ・Ⅱ」でご指導して下さった佐藤洋一・白井正康先生, 「実習Ⅲ」でご指導して下さった中妻雅彦先生, そして論文作成や国語科授業づくり等, いつも具体的に温かくご指導して下さった佐藤洋一先生に, 心より感謝申し上げます。本当にありがとうございました。